エール
—薬剤師の幸せな人生を願って—

鍋島 俊隆
NPO法人医薬品適正使用推進機構理事長／藤田医科大学客員教授／名古屋大学名誉教授／Al.I. Cuza大学（ルーマニア）名誉教授

第 10 回

医療用麻薬に対する誤解を解き緩和ケアを進めよう

最近では外来（がん）化学療法が一般的となり、がん患者が自宅で家族とともにすごせるようになっている。患者のQOL向上の点からも、医療費抑制の点からも喜ばしい。

外来化学療法では、病院薬剤師が薬剤師外来で患者に抗がん剤、ホルモン療法、放射線療法の効果や副作用、がんによる疼痛の緩和について指導している。一方、患者は自宅で療養するので、薬局薬剤師が病院薬剤師の情報を共有できるようにするために薬薬連携が重要となる[1]。また、薬局薬剤師は、がん患者のケアをするためにがん領域の知識の向上に努め、医療用麻薬処方せんの応需のために麻薬小売業者の免許を取得し、休日や夜間の対応のために薬局間の譲渡譲受を行う体制の構築などに積極的にかかわるべきである。

医療用麻薬による患者のケアは、痛みによる体力のみならず精神面での消耗を防ぐだけでなく、家族のQOLを高められる[2]。しかし、日本の医療用麻薬の使用量は、治療に必要な量のわずか15.54%と少ない。これは、患者が麻薬は使ってはいけないもの、怖いものなので、処方量を使わなかったり、治療ができないときに最後に使う薬だと思い込んでいたりするのに加えて、医師も手術や抗がん剤によって疼痛も治ると考えて緩和ケアの重要性を理解していないからだと、私が主宰するNPO法人医薬品適正使用推進機構の鈴木勉理事は報告している[3]。

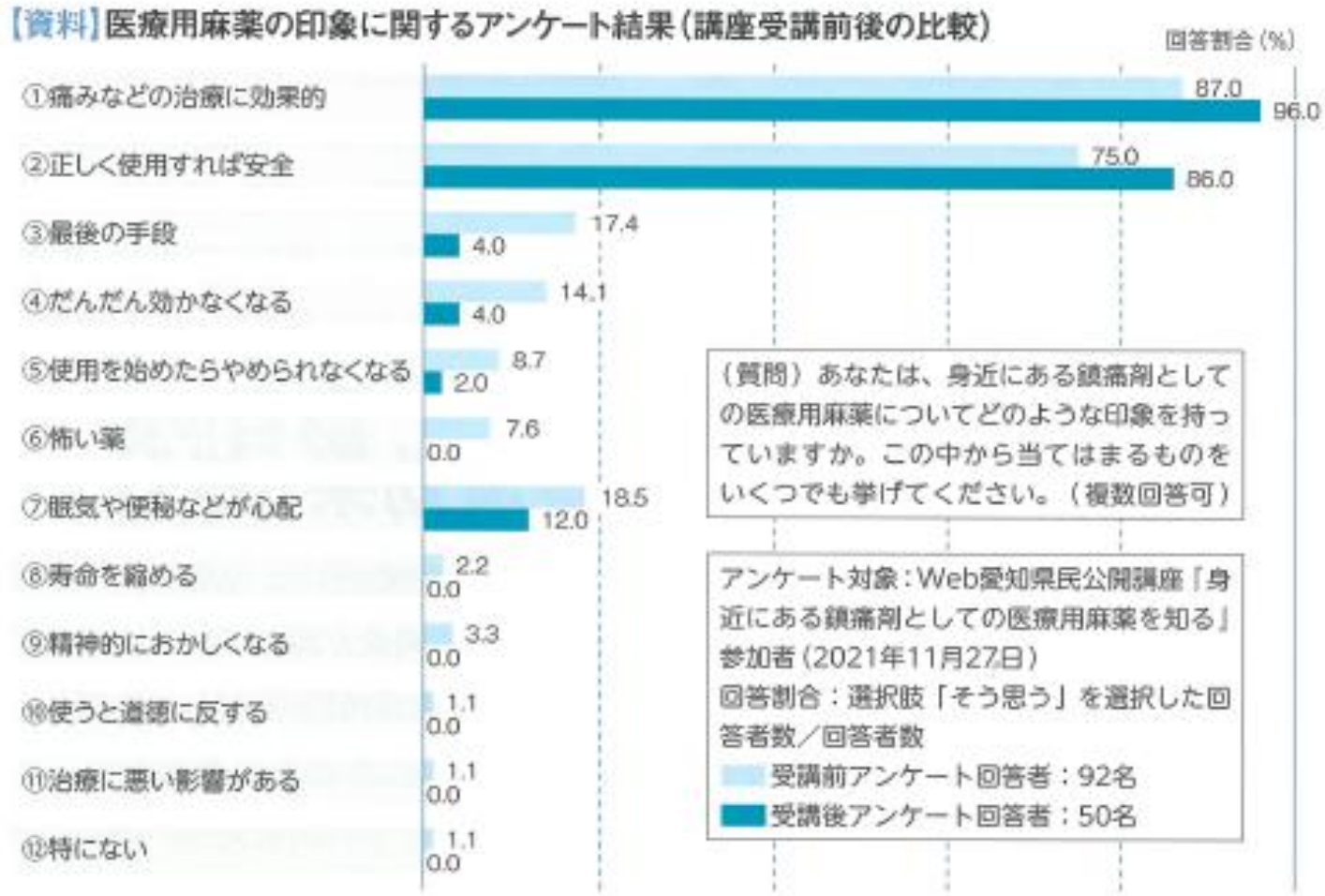
先般、医療用麻薬の適正使用について、当機構は愛知県と市民公開講座を共催した[4]。その際、講座の前後で医療用麻薬に対する市民の意識がどう変わるかを確認するため、次の12項目が医療用麻薬に当てはまるかを問うアンケートを取った（【資料】）。

①正しく使用すれば痛みなどの治療に効果的だ／②正しく使用すれば安全だ／③最後の手段だ／④だんだん効かなくなる／⑤いったん使用を始めたらやめられなくなる／⑥「麻薬」という言葉が含まれていて怖い／⑦眠気や便秘などの副作用が強い／⑧寿命を縮める／⑨精神的におかしくなる／⑩使用することは道徳に反することだ／⑪疾患の治療に悪い影響がある／⑫特にない

市民公開講座を受講した市民では、受講前とくらべると①、②が増え、⑦を除いて③から⑫が激減し、医療用麻薬に対する誤解が消え、信頼性が向上した。したがって、薬剤師が正しい知識を提供すれば、医療用麻薬に対する市民の考えは大きく変えられる可能性があると言える。

そこで、薬局でも患者、家族に医療用麻薬に対する理解を深めてもらえるよう働きかけて、適正使用、患者のQOLの向上につなげよう。さらに、外来がん治療認定薬剤師をめざし、抗がん剤の適正使用を進め、患者のQOLを向上させよう[5]。

【資料】医療用麻薬の印象に関するアンケート結果（講座受講前後の比較）



出典：長谷川真司氏、鍋島氏作成資料

Profile なべしま・としたか　1973年大阪大学大学院薬学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学大学院医学系研究科教授、同大学医学部附属病院薬剤部部長（併任）、名城大学大学院薬学研究科教授、名城大学比較認知科学研究所所長（併任）などを経て、現職

[1] PharmaStyle Special Report：がん薬物療法における病院薬剤師の役割とは？外来がん患者を切れ目なく支えるために、外来がん治療認定薬剤師アンケート調査結果（日本臨床腫瘍薬学会学術大会2018年3月開催で発表）、m3.com「ファーマスタイル」2018年9月号　[2] 厚労省医療用麻薬の適正使用 2017：https://www.mhlw.go.jp/bunya/yakuhin/yakubutsuanpou/di/iryo_tekisei_guide2017_03　[3] 鈴木勉：医薬品適正使用・乱用防止推進会議、正しく知る「医療用麻薬」。がんによる疼痛を緩和する、効果と仕組み、あきらめないがん治療ネットワーク、https://www.akiramenai-gan.com/about　[4] 山田清文、鍋島俊隆：身近にある鎮痛薬としての医療用麻薬を正しく知る、Web愛知県民公開講座、愛知県、特定非営利活動法人医薬品適正使用推進機構、協賛製薬株式会社共催、2021年11月27日　[5] 日本臨床腫瘍薬学会：外来がん治療認定薬剤師制度、https://jaspo-oncology.org

©㈱ファーマシィ,『TURNUP No.58』2022.8.1発行より抜粋